

Nathanael West 研究 —Miss Lonelyhearts とは誰か—

今井夏彦

Nathanael West の作品世界を支配しているのは狂気である。しかも、それは「誠実な」狂気である。まさしく、誠実であろうとしすぎるために、例えば、*Miss Lonelyhearts* (1933) における主人公 Miss Lonelyhearts は「人生相談」の犠牲者になり、また、*The Day of the Locust* (1939) の Homer Simpson は insanity の世界へ迷い込んだ挙句、大衆の暴動の渦の中に呑みこまれてしまう。

では、Miss Lonelyhearts (以下Miss L. とする) は何をしたか、いやしなかったか。しなかったというよりも、できなかったと言った方が適切だろう。そもそも「人生相談」の投書者の苦悩に救いの手を差しのべることなど、なんびとにも不可能である。もともとこの欄は、新聞の発行部数の増加が目的のものであり、社の人々は、皆それを joke だと心得ている。確かに、「人生相談」の欄は人生の縮図と言えよう。だが、この場合、縮図と呼ぶにはあまりにも悲惨な訴えばかりが眼につく。事実、Miss L. は冒頭から何もしていない。

The Miss Lonelyhearts of The New York *Post-Dispatch* (Are-you-in-trouble?—Do-you-need-advice?—Write-to-Miss Lonelyhearts-and-she-will-help-you) sat at his desk and stared at a piece of white cardboard.¹⁾

ただ自分の机に向かい、白い紙をじっと見つめているだけである。本来の回答を書くという仕事を、きちんと果してない。作品の中でタイプをたたくのはわずかに数回であり、それも満足できるものでは決してない。小説の中での Miss L. の行動半径は非常に狭く、恋人 Betty との田園行きと、ベティ、上司 Shrike、投書者のひとり Doyle のそれぞれのアパートを訪れたことを除けば、新聞社、もぐり酒場、時折り立ち寄る公園、そして彼自身のアパートの間の往復だけである。その空間で、彼は、タイプに向かい、人と会って酒を飲み、眠ることを繰り返す。そして、その中で彼は

着実に「死」へと向かって行く。

Miss L. の運命を決定的に変えたのは、投書者の Mrs. Fay Doyle と会ったことである。この出来事が、この小説の“turning point”と言えよう。つまり、人々の悩みに紙上で答えるという本来の務めを怠り、日常の行動を逸脱し、「外」の世界へと脚を踏み出してしまったからである。²⁾ しかも、一度クズカゴに捨てたはずのドイル夫人の手紙に応じて電話連絡をしてしまう。Miss L. にそうさせたのは、おそらく悩める者への唯一の回答となりうるはずの、キリストの愛への不信感なのだ。(If he could only believe in Christ, then adultery would be sin, then everything would be simple and the letters extremely easy to answer.³⁾) 新聞紙上以外で投書者と会うこと、キリストへの不信感を抱くこと、という二つの禁を破ったために、つまり、order (秩序) を希求してやまない Miss L. 自身が order (約束事) からはずれたことをしてしまい、それが彼の破滅を招くという、愚かしくも痛々しいアイロニーが鮮明に示され、そこから彼の“a dying fall”が始まるわけである。⁴⁾

Miss L. は実によく眠る。⁵⁾ 仕事をしない分それだけよけいに眠るのかもしれない。しかし、ほんとうは休息を持たらずはずの眠りが、彼の場合はその役割を果たしていない。何しろ、回答が書けず (“Miss L., help me, help me”), もぐり酒場へ行きシュライクの演説を聞かされ (“Miss L. and the dead pan”), その後アパートに帰り床に就くと夢を見る (“Miss L. and the lamb”) が、その夢の中で、大学生である彼が友人と祭壇に捧げた lamb (キリスト) を殺してしまうのである。つづく眠りは、あるいは二日酔いを伴い、あるいは病床の眠りであり、唯一の安らかな眠りは、ベティの叔母の農場でのひとときのものであるが (“Miss L. in the country”), 再びニューヨークへ戻ってくると (“Miss L. returns”), 彼の心の変化は見られないことがわかる。⁶⁾ どうあっても、手紙が頭から離れないのである。そこで、自嘲してみずからを“fake” (サギ師) と決めつけ、自分には「謙虚さ」が「不足」している (“his lack of humility”) と意識の転換を図り、眠りにつく。ところが、翌朝社に出向くと、皮肉にも “Broad Shoulders” という女性から、おのれの不幸を切々と訴えた最も長い投書が Miss L. を待っている。

それでも、彼の努力はある程度功を奏したのか、シュライクのいつもの “Miss Lonelyhearts are the priests of twentieth-century America” などという冗談も効かない。⁷⁾ そんなとき、“a field trip” の相手 (Mrs.

Doyle) の夫 Peter Doyle と例のもぐり酒場で会い、哀れな彼を救おうと彼のアパートにふたりで行くが、⁸⁾ Mr. Doyle が買物に出ている間 Mrs. Doyle に言い寄られ、振りきろうとして彼女をなぐってしまう。Miss L. の “Christ Dream” が裏目に出る。性急に order を求めようとする、往々にして violence の形を取る。⁹⁾ Miss L. はまた床に就く。今度は、彼は心の鎮まりを覚える。(“He thought of how calm he was.”)¹⁰⁾ しかし、やはり三日間もベッドに横たわるといふのは、尋常ではあるまい。こうして、彼は「岩」(“rock”) になる。言うまでもなくキリストのシンボルでもある。“calm,” “solid,” and “perfect” な岩には、酔って訪れたシュライクも歯が立たない。¹¹⁾ にも拘らず、シュライク宅のパーティーに誘われ、同伴したベティにプロポーズするその「岩」が、皮肉にも感情を殺した単に物質的なものになってしまうのである。¹²⁾ またまた Miss L. は床に就く。(“He had only to climb aboard the bed again,”)¹³⁾

御膳立ては揃った。最終章 (“Miss L. has a religious experience”) で Miss L. は何を体験したのか。彼は、まず発熱する。それは、“heat” と “mentally unmotivated violence” を約束する。堅固だった「岩」が「溶鉱炉」となる。既に、order の世界から遠ざかり insanity の世界へと入りつつある。部屋が “black world” となり、壁にかかっているキリストの像が “a bright fly” (「輝くハエ」) になる。彼はキリストの名を叫び、キリストと一体化する。ここで、ドイルの突然の訪問を受け、キリストのつもりの Miss L. が手を差し伸べるが、妻を乱暴されたと誤解したドイルの持ってきたピストルが暴発して、両者共階段から転落する。¹⁴⁾ ウェストは、この作品について次のようなコメントを残している。

With this last idea in mind, Miss Lonelyhearts became the portrait of a priest of our time who has a religious experience. His case is classical and is built on all the cases in James' *Varieties of Religious Experience* and Starbuck's *Psychology of Religion*. The psychology is theirs not mine. The imagery is mine. Chapt. I-maladjustment. Chapt. III-the need for taking symbols literally is described through a dream in which a symbol is actually fleshed. Chapt. IV-deadness and disorder ; see *Lives of Bunyan and Tolstoy*. Chapt. VI-self-torture by conscious sinning : see life of any saint. And so on.¹⁵⁾

このコメントと小説の関連について、Marcus Smith は、ウェストが挙げている二名の内のとりわけ重要だと思われる、Henry James の兄の William James の著作を参照しながら、Miss L. の言動を鋭く分析している。まず、上述の Miss L. の “maladjustment” (不適應) は、James の “the Sick Soul” と呼ぶ症状に相当するという。¹⁶⁾ また、トルストイを引き合いに出し、同じ “anhedonia”¹⁷⁾ の典型的な例として、第2章における公園での Miss L. のよく知られた心象風景を挙げている。

As far as he could discover, there were no signs of spring. The decay that covered the surface of the mottled ground was not the kind in which life generates. Last year, he remembered, May had failed to quicken these soiled fields. It had taken all the brutality of July to torture a few green spikes through the exhausted dirt.¹⁸⁾

ジェイムズによると、“James emphasizes that anhedonia is a subjective state of perception”¹⁹⁾ であり、「外の世界」が「心の内の混乱」によって見方を変えられることになる。上の引用では、初めの、“As far as he could discover,” という表現で、すでに主観的な見解に限定されてしまっていることになる。小説全体にわたって、“this biased point of view” が使われている、としている。

Miss L. は、この “the Sick Soul” の状態から抜け出ようと、酒を飲み、ドストエフスキー（「カラマゾフの兄弟」）を読み、ベティと接し、violence や sex を演じてみるが、効果は見られない。結局、最後に彼はキリストに身を委ねようと試みる。²⁰⁾ この場面は、ジェイムズの指摘するように、16世紀に宗教改革の対抗改革としてイエズス会を創立した、Saint Ignatius Loyola の神秘的な “religious experience” に即して、ウェストが描いたものらしい。²¹⁾ しかし、ジェイムズの “religious experience is to be judged by its effects.”²²⁾ という基準からみると、破滅に終わった Miss L. のそれは、拭いきれない不信感を内に孕んだキリストとの同化の試みであったために失敗するほかはなく、Smith の結論づけるように、やはり “a false quest” を運命づけられていた、と言うしかあるま

い。

とは言え、Miss L. の “religious experience” の蹉跌がもたらす破滅によって、この作品が精彩を欠くということは毛頭ない。繰り返すが、彼が「誠実」であろうとしたための悲劇なのである。彼は、“all nerves and no skin” であり、普通の生活のごく普通の恐怖に対しても苦しみを覚える “the fool of pity” なのだ。²³⁾

It is the final modern turn of the gothic screw : the realization that not the supernatural, the extraordinary, but the ordinary, the everyday are the terrors that constrict the heart.²⁴⁾

つまり、「超自然的なもの」や「異常なもの」ではなく、「日常のありふれたもの」が「心を締めつける恐怖」だという認識を我々に与えてくれたわけである。

それでは、このような不条理な運命を背負わされなければならない Miss L. とは、いったい何物なのか。再び冒頭に戻ってみよう。

“The Miss Lonelyhearts of The New York Post Dispatch……” という書き出しからわかるが、主人公であり、作品のタイトルでもある Miss L. に、“The” が付けられている。ふつう、個人としての固有名詞に、定冠詞がかぶせられることはないだろう。彼の場合、個人であって個人でないのである。²⁵⁾ 彼のような立場になれば、誰しものが同様の苦悩を抱くにちがいない。もちろんウェストは、小説により普遍性を持たせるために、Miss L. という名を選んだのだろう。フランスの「ヌーヴォー・ロマン」の代表的な作家であるロブ＝グリエは、次のように述べている。

『城』のKとなると、頭文字だけで満足し、なにひとつ所有していない。家族もなければ、顔もない。おそらくは彼は、測量技師なんかでさえまっただくなかったのであろう。

こうした例はいくらでも挙げることができよう。事実は、伝統的な意味での作中人物の創造者たちは、もはや彼ら自身も信じなくなった操り人形しか、われわれに提示しえなくなったのである。作中人物にたよる小説は、はっきり過去に属し、ある一時代、すなわち個人というものの全盛期を画した時代を特質づけるものである。……小説は主人公という、昔のその最良の支えを失ってよろめいているように見える。²⁶⁾

これは、「時代おくれの若干の概念について」という章からの引用だが、従来のような、はっきりした作中人物とよくわかるストーリーを持つ小説は、次第に姿を消しつつあることの説明だと思われる。

すると、Miss L. は、確かにひとりの人間だが、他人と交換してもかわらない存在でしかない、と言えるかもしれない。おのずから、都市生活における“anonymity”（「無名性」）という表現が連想されよう。それでも、我々読者にとって Miss L. の存在は大きく、逆説めくが、たとえ作者ウェストの名は忘れても、Miss L. の名を忘れることはないだろう。

上述の引用中に、例としてカフカの「城」が挙げられていたが、ウェストを論じている評者は、概ねカフカにも言及している。ウェストの詳細な伝記を書いた Jay Martin によると、彼は1930年に「城」の翻訳を読み、*Miss Lonelyhearts* を仕上げている間も、カフカを読み続けていたという。²⁷⁾ Victor Comerchero は、ウェストの“grotesque irony”の要素はカフカとシュール・リアリズムにその源があるものとし、²⁸⁾ Robert E. Long は、ウェストの作中人物はカフカのように“some absolute truth”を目指して奮闘するが、“only to be confronted by the horror of emptiness in their Godless worlds,” だと解説している。²⁹⁾ フィン・ドラーは、はっきりと両者のユダヤ性について論及している。徹底して「世俗的」かつ「宗教的」な“anguish ridden comedians”であるユダヤ人としての特徴は、“creating myths of urban alienation and terror”ことに巧みな点にある。³⁰⁾ 永い間放浪し自分たちの国を持たなかったユダヤ人にとって、都市が逆に“at home”になってしまったというアイロニーは自明なことであり、都市生活の「疎外」と「恐怖」を描くことが達人なのも当然と言えよう。

最後に、もう一度小説の冒頭部を考えながら、カフカの「城」の始まりとの比較検討をしてみたい。

Kが到着したのは、夜もおそくなってからであった。村は、深い雪のなかに横たわっていた。城山は、なにひとつ見えず、霧と夜闇につつまれていた。大きな城のありかをしめすかすかな灯りさえなかった。Kは、長いあいだ、国道から村に通じる木の橋の上に立って、さだかならぬ虚空を見あげていた。³¹⁾

測量師Kは、城から呼ばれて、城のある村へやって来た。人生相談回答者の Miss L. は、シュライクに命ぜられて、その欄の担当者になった。城は、「霧と夜闇につつまれて、」城を示す灯りもない。Miss L. は、締切りが過ぎているのに、続ける言葉が見つからない。Kは、木の橋の上に立って、「さだかならぬ虚空を見あげていた。」Miss L. は、机に座って「白紙を見つめていた。」あるはずの城が見えないKと、どうしても回答が書けないMiss L. この両者は共に、小説の出だしからすでに途方にくれている。³²⁾

結局、Kは城に入ることができず、Miss L. は満足な回答を書けないまま悲惨な最期を遂げる。常に何かを求めながら得られない状況を終始描きつづけたカフカとウェストは、ユダヤ人として共に同じような資質をもっていたのかもしれないし、また、現代人の凄まじくも本質的な孤独を、いち早く見究めていた二人が似ているのは、至極当然なことなのかもしれない。

Notes

- (1) Nathanael West, *The Complete Works of Nathanael West* (New York : Octagon Books, A Division of Farrar, Straus and Giroux, 1978), p. 65.
Irving Malin は、「座って、」「ながめて」いる描写に Miss L. の受動的側面を見、同時に何かを求めている点に、“a paradoxical combination of passivity and activity”がある、と説明している。また、「白い」紙に“the blankness of life”を読み取っている。*Nathanael West's Novels* (Carbondale and Edwardsville : Southern Illinois University Press, 1972), pp. 31-2.
- (2) ウェストは、この章に“Miss L. on a field trip (研究実地旅行)”というタイトルをつけるアイロニーも用意している。
- (3) West, p. 99.
- (4) “a dying fall”については拙論参照。「英米文学研究」第24号、梅光女学院大学英米文学会、1988年。
- (5) “throughout the novel he alternates between ‘field trips’ and sleep-

- ing.” Malin, p. 60.
- (6) “Miss Lonelyhearts knew that Betty had failed to cure him and that he had been right when he had said that he could never forget the letters.” West, p. 115.
- (7) West, p. 122. もっとも Miss L. の容貌は “Old—Testament look” であり, “the son of a Baptist minister” のようだとの説明があり, 人を救うには適しているのかもしれない。
- (8) “Miss Lonelyhearts was very happy and inside of his head he was also calling on Christ. But his call was not a curse, it was the shape of his joy.” West, p. 126. ここでは, 彼の謙虚さが本物になりつつあるような印象を受ける。
- (9) ウェストの作品の “violence” については, 過去の「紀要」拙論で言及しているのでここでは触れない。
- (10) West, p. 131.
- (11) “Shrike, dashed against him (=Miss L.), but fell back, as a wave that dashes against an ancient rock, smooth with experience, falls back. There was no second wave.” West, p. 132.
- (12) “He (=Miss L.) did not feel guilty. He did not feel. The rock was a solidification of his feeling, his conscience, his sense of reality, his self—knowledge. He could have planned anything.” West, p. 138.
- (13) *Ibid.*
- (14) このラストシーンは, 実は第3章の “Miss L. and the lamb” に予見されているのではないか。始めに述べたように, Miss L. は夢の中でいけにえの “lamb” を殺すが, この章は次のような描写で終わっている。“He crushed its (=lamb) head with a stone and left the carcass to the flies that swarmed around the bloody altar flowers.” (下線は筆者) West, p. 78. そもそも, 「ハエ」は, 「不純物,」「欺瞞,」「傲慢」等のシンボルであり, ユダヤ人にとっては, 「偽りの神,」や「悪魔」を表していた。
- (15) “Some Notes on Miss L.,” *Nathanael West : A Comprehensive Bibliography*. William White ed. (The Kent State University Press, 1975), p. 166. 文中の “this idea” とは, その直前の表現 “You can not learn from him (=Freud)” のことである。
- (16) “The Sick Soul is obsessed with the presence and force of evil……” Marcus Smith, “Religious Experience in *Miss Lonelyhearts*,” *Na-*

-
- thanael West's Miss Lonelyhearts*. ed. Harold Bloom (New York, New Haven, Philadelphia : Chelsea House Publishers, 1987), p. 39.
- (17) O. E. D.によると“*Inability to feel pleasure*”（無快感症）とあり、とくに性的な面でのものを言うらしい。その特徴のひとつとして、Jamesの表現だが“*passive loss of appetite for all life's values*”が挙げられている。Smith, p. 39.
- (18) West, p. 70.
- (19) Smith, p. 40.
- (20) しかし、どうしても、“*With him even the word Christ was a vanity*” (p. 116) という思いは心の奥底に潜んでいただろうし、また、最終章のタイトル“*Miss Lonelyhearts has a religious experience*”は明らかに本文中の“*Some Notes on Miss L.*”からの引用にあるように、ジェイムズの著作に習ったものと考えられる。
- (21) Smith, p. 50.
- (22) Smith, p. 52.
- (23) Leslie A. Fiedler, *Love and Death in the American Novel* rev. (Harmondsworth, Middlesex, England : Penguin Books, 1984), p. 487.
- (24) *Ibid.*
- (25) 一方、Miss L. に理不尽な役割を押しつけたシュライクに、Willie Shrike というフル・ネームがあるのも好対照である。面白いことは、他の登場人物の外見はだいたい言及されているのに、シュライクだけ省かれていることである。文字通り、shriek（叫ぶ）し、冗談を飛ばし、演説するだけの機械なのだろう。
- (26) ロブ＝グリエ「新しい小説のために」平岡篤頼訳（新潮社、1967年）、pp. 33—4.
- (27) 「城」以外の作品がいつ翻訳されたのか不明だが、*A Cool Million* の Lemuel Pitkin は「審判」の Joseph K. に相当する、と述べている。Jay Martin, *Nathanael West : The Art of His Life* (New York : Farrar, Straus and Giroux, 1970), pp. 82, 236—37.
- (28) Victor Comerchero, *Nathanael West : The Ironic Prophet* (Seattle and London : University of Washington Press, 1967), p. 36.
- (29) Robert Emmet Long, *Nathanael West* (New York : Frederick Ungar Publishing Co., 1985), p. 152.
- (30) Fiedler, p. 487.

- (31) カフカ「城」前田敬作訳（新潮文庫，1971年），p. 9.
- (32) また，Kはこの直後に，「やがて，泊る場所をさがしに出かけた。」とあり，宿屋を見つけてすぐ眠りに就くが，作中でも Miss L. と同様よく眠る。さらに，Nathanael West というペン・ネームは，1926年に付けたらしいが（Martin, p. 78.），「城」の持主は Westwest 伯爵という名であり，また，アルファベットでKの次はL（Miss L.）だが，これらは偶然だろうか。日本では，若手作家の小林恭二に「迷宮生活」という中編があり，主人公のKは，狂気の世界へととのめり込んでいく。明らかに，カフカを意識した作品だろう。